

## 酒飯論絵詞

夫我君のまつり事たしくまし〜  
て御代におさめ萬民をあはれみ給ふ  
事漢家明王のむかしははるかなれば  
延喜天曆の帝とても是にハいかて  
まさるへき 御めくみかしこき故に民の  
かまともなきハひ道俗男女にいたる  
まで今此御代に生まれあひたる事の  
ありかたさよとて 笑をふくまぬ人も  
なし かミ雲上の明くれば詩歌管絃の  
御遊興 下萬民のひる夜にハうたひ  
さかもりこ、かしこ 何につけてもゆた  
かにたのしみあへるけしき也 しかるに  
三人のともからよりあひ 心にひくかた  
をあらそひ侍りける 一人は造酒糟屋朝臣  
長持とて大上戸也 一人の僧ハ飯室律  
師とて好飯下戸也 今一人ハ忠左衛門  
大夫中原仲成と申酒飯ともに中戸  
也 されはめんくのたのしみをいひ 哥  
をよみ後の世までもおもひ入たるけし  
き見えけり

(翻刻)

夫我君のまつり事たしくまし〜  
て御代におさめ萬民をあはれみ給ふ  
事漢家明王のむかしははるかなれば  
延喜天曆の帝とても是にハいかて  
まさるへき 御めくみかしこき故に民の  
かまともなきハひ道俗男女にいたる  
まで今此御代に生まれあひたる事の  
ありかたさよとて 笑をふくまぬ人も  
なし かミ雲上の明くれば詩歌管絃の  
御遊興 下萬民のひる夜にハうたひ  
さかもりこ、かしこ 何につけてもゆた  
かにたのしみあへるけしき也 しかるに  
三人のともからよりあひ 心にひくかた  
をあらそひ侍りける 一人は造酒糟屋朝臣  
長持とて大上戸也 一人の僧ハ飯室律  
師とて好飯下戸也 今一人ハ忠左衛門  
大夫中原仲成と申酒飯ともに中戸  
也 されはめんくのたのしみをいひ 哥  
をよみ後の世までもおもひ入たるけし  
き見えけり

(現代語訳)

わが主君の政り事が正しく行われていまして、  
世の中を治め、万民をいつくしみくださる事、  
漢の国の名君の昔ははるか遠いことなので  
おくらへすることはできません。  
日本の延喜天曆の帝といえども、わが主君にはどうして  
まさることができたらうか。主君の御めぐみがすばらしい故に民の  
寵も賑い、道俗男女にいたるまで  
今、この世に生まれ合わせた事の  
有り難さよと、喜ばない者は  
いない。天子様、禁中の明け暮れは詩歌管絃の  
御遊び、下々万民は昼夜には歌い  
酒盛りがここかしこで行われ、何にしても  
豊かに楽しみあう様子である。そうした中で  
三人の友人が寄り合い、好物の良さを  
言い争っていた。一人は造酒糟屋朝臣長持  
といって大上戸。一人の僧は飯室律師という  
好飯、下戸。今一人は忠左衛門  
大夫中原仲成という酒、飯ともに程ほどに好きな者である。  
そこで、それぞれの楽しみをいひ、歌を  
詠み、後世まで残そうと思っっているように  
見えたのである。







## 解説

『酒飯論絵詞』の初段。詞書は治世のめでたいことを寿ぎ、やがてこの絵巻の主人公である造酒長持と飯室律師、忠左衛門大夫仲成の紹介がかかる。絵は三人が飯室律師の屋敷に寄り合い、論争をしている様子。座敷の隣では茶を挽いている様子が描かれる（表紙に拡大した図を載せた）。